

『不埒なインセンティブ』

著：崎谷はるひ

ill：タカツキノボル

(ばかじゃないか、俺……)

いまさらの自己紹介で、冷や水を浴びせられた気分だった。

和典はアルバイトをしていると告げたが、具体的にどんなレストランで働いていることすら言っていなかった。そして日比谷もまた、テレビ関係の仕事をしていると教えてくれてはいたが、どこに勤めてどんなことをやっているのかまでは、教えてもらえていなかった。

(こんなんで、すっかり打ちあけたり、わかったつもりでいたなんて)

穴だらけのプロフィールすら、ゼロ以下だった和典には貴重な情報だった。だからずいぶん知れたつもりでいたのに、なにもかも、スタートラインについた程度だったのだ。

自分への憤りは腹の奥でおさめ、あとはひたすら世間話に終始した。以前譲ってもらった資料の話もあって、なんとか会話はつなぐことができた。個人的な会話は苦手でも、仕事やそれに絡むことであれば多少なめらかに舌もまわる。

「え、っと。この間は資料、送ってくださって、ありがとうございました」

「いえいえ。役に立ったならよかったけど、古いやつだから使えた？」

じっと目を見て話しかけられ、和典は一瞬うろたえそうになる。どうにか目をしばたかせ、ふつうの表情をとりつくろった。

「はい。チェックしてある部分とかあって、参考になりました。ご親切に……」

顔が赤らむのだけはどうしようもないけれど、ろくに飲んでいないアルコールのせいにしてほしい。本当は冷や汗で背中がびっしょり濡れていたけれど、日比谷にばれなければそれでよかった。

よしんばばれたところで、大人な彼は見て見ぬふりをしてくれるだろう。案の定、すこしうわずった和典の声や顔色にまったくふれず、日比谷は礼儀正しく仕事の話が続けた。

「電子配信系とか、サイトデザインなんかも請け負ってるから、もし店のほうで使うことあったらぜひ。ケーブルのローカル番組なんかも手がけてるんで、よさそうなら紹介もありですよ」

「あ、ありがとうございます！ 店長に話しておきます」

しかし、すっかり営業トークをはじめたふたりに、寺山が「ちょっとなにこんなところで仕事してんのよ」と突っこんできた。

「人脈作りは大事でしょ。それに U-rara……じゃない和典くん、あんたらと違ってまっとうそうだから、まっとうに対応してるんじゃない」

「ひっどい！ なにそれ！ アタシらだってまっとうじゃないの！」

「うっさいわよ、筋肉ばか！」

「なあんですって、このエロ垂れ目！」

寺山と言いつつ日比谷の口調は、ネットでのしゃべりかたと同じ雰囲気になっていた。オネエ全開の顔ぶれに引き気味だったうえ、緊張していた和典に気を遣ってくれてい

たのだろう。

(だめだなあ、ほんとに。スキルなくて)

ひとり反省していると、賑やかな集団へと軽やかな足音が近づいてきた。

そして日比谷の背後から、にゅっと細い腕が突きでる。

「なーに気取ったしゃべりかたしてんの？」

「真幸……」

日比谷の背中に抱きつくようにして現れたのは、真幸だった。三年経っても相変わらずはなやかで、近くで見るとますますきれいな彼に、和典はどぎまぎしてしまう。

「うっとうしい、離れなさいよ」

「つめたい。なんだよ、せっかくあっちの連中から抜けてきてやったのに」

「頼んでないし。ナオさんトークでうんざりしてたアタシらの気持ちを思い知れ」

「ごめんってば。でもちょっとみんなしつこいんだもん」

「知るか。もっといじられてろ」

「ええええー」

邪険に腕を振り払いにしても、日比谷は笑っていた。真幸もまた、うちとけた表情で微笑んでいる。わかっていたことだが、相変わらず仲がいいのだなと、あらためて思った。

「ところで、こっちは U-rara ちゃん？ だよね」

「えっ、あ、はいっ」

突然こちらに視線を向けられ、和典はどきりとした。真幸を間近で見ると、顔のちいささと目の大きさに驚いてしまう。

「はい、って。なんだか、ずいぶんまじめさんっぽいね。あ、だから日比谷、よそゆき口調だったのか」

「いいから、ちゃんと名乗りなさいよ」

「はい。ちゃんと挨拶できなくてごめんねー。俺がマキです。名執真幸」

日比谷の肩に手をかけたまま、和典とは反対の隣に腰かけ、「よろしくね」と真幸が笑う。なんだかきらきらして見える笑顔に圧倒されていると、日比谷があきれたように言った。

「アンタみたいいきなりフレンドリーにやれるひとじゃないの。この子、平田和典くん。ふつうに名前と呼んだけなさいよ」

「はあい、はい。オカンはうるさいですね」

「誰がオカンなのよ！ もう、あんたはナオさんトークでいじられてなさいってばっ」

しなだれかかる真幸を、邪険に押しやりながらも日比谷の顔は笑っていた。

気の置けないやりとりをするふたりを見ていると、どうしても和典はもやもやしたものを感じてしまう。彼らが話したすと、まったく口をはさめないのだ。

ふたりの親密さは、独特なものがあつた。そのほかの顔ぶれたちとも仲よくしているけれど、このふたりがつるんでいると誰も間にはいれないような、そんな空気ができあがるのだ。証拠に、日比谷と真幸がしゃべっている間は、寺山もそれほど突っこんではいけない。

(だからなに、って話なんだけど)

話しぶりからも、真幸はダーリンこと、『ナオさん』にべた惚れのようなだった。

嬉しそうに携帯待ち受けになっている写真を見せられて、男前ぶりを冷やかしつつ

もっそり「かっこいいけど怖そうだな」と和典は思った。

(俺はもっと、やさしそうなひとのほうがいい)

というより、けっきょくは日比谷だけが好きなのだ。視界の端に彼がいるだけで、胸が高鳴り苦しくなる。何度も盗み見て、同じ空間にいることの幸いを噛みしめてしまう。

(ほんと、末期だ)

本文 p140～145 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>